

---

# 空巢の風紀委員

春寝 暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空巢の風紀委員

### 【Nコード】

N4898Z

### 【作者名】

春寝 暁

### 【あらすじ】

一見なんの変哲のない町「空巢町<sup>カラス</sup>」。平和でのどかで大きな問題があるでもない平凡な町だと思っていた地元が奇奇怪怪魑魅魍魎な者共が跳梁跋扈する町だと知ったのは高校に上がる前の寒い冬の事だった。

これは常識人こと「晴智晴之」が出会い、あるいは聞いたご町内で的事件を書く物語である。

## 状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年

俺こと晴智<sup>ハルチ ハルユキ</sup> 晴之は夜道を歩いていて。何をしてもなくただひたすらに歩いているだけ。目的なんてない。言うなれば散歩みたいなものだ。眠れないので散歩。夢遊病か俺はなんて一人ツツコミを入れながら、今日も空巢町を彷徨っている。目的もなく、ただ真っ直ぐぼんやりと夜道を歩くだけ。

「そこの中学生、待ちなさい」

呼び止めた声は随分と若かった。

ゆっくりと振り返れば、黒髪の少女が街灯の明かりを背に受けて立っていた。

着ている制服は地元の私立高校の制服だ。来年になれば俺も入学するところだった。

……いや。違ったか？幼馴染のパンフで見たのだろうか？制服が力ワイイとか何とか…？

この歳にしてボケとか笑えない。記憶が混乱しているぞ。しっかりしろ。俺。

「こんな時間にこんな所で何している？」

「いや…散歩です。眠れなかったので」

「若いのに夢遊病か？大変だな」

「はあ…」

初対面の人にツツコミを入れられた。

うん。まあ…そうだよ。うん。丑三つ時だしね。

気がつけば知らない場所歩いているなんて「変」以外の何者でもないからね。

「そう。君、名前と学校は？ついでに出席番号」

「空巢公立東中学。3 - 4。晴智晴之。出席番号……は……？」

「どうしたの？覚えてないの？」

「すみません。ちょっと待ってください」

なんてことだ。もう結構日にちも経っているはずなのに出席番号をド忘れするなんて。

今日の俺は俺らしくない。これは本当にボケ老人の症状が出ているのかもしれない。

ああ……29？くらいだったかな？9だったのは覚えてる。うつすら。二桁だった。

19？29？39？49？ いやいやいやいや。クラスメート多いな俺。

ならならここは無難に……。

「29？」

「わからないなら適当な事を言っな」

「いやいや本当ですって。29番目くらいだったらいいなあって。後ろ過ぎず前過ぎない」

「いいなあってお前の願望じゃん」

「お姉さん。ツッコミ気質ですか。苦労してるんですね」

「話を摩り替えるな！」

否定はしなかった。どうやら相当苦労しているらしい。

「じゃ。次。電話番号と住所は？」

「電話番号は

で住所は空巢町4丁目

。

つて言っても親は今海外に行っていて留守ですよ」

「ふうーん。そう。じゃあ中学生三年生にして夢の一人暮らし？いいわね」

「そんな事ないですよ。近所の幼馴染が毎日飯作りに来たり、掃除しに来たりするんで」

「そうか。いい幼馴染だな」

「まあ…悪くはないですよ」

「大切にしろよ。それじゃ」

そのお姉さんは質問した事にメモだけ取ると暗い夜道を去っていった。

彼女がつけていた腕章には覚えがある。この土地の御三家が決めた警察とは別の自治組織。

時には暴力で、時には知略で、新しい町長と共にやってきた犯罪者を摘発し住民の生活を護っている正義の味方。

地元定着ヒーローとして名を轟かせるカリスマ的存在だと地元の新聞で読んだと思う。

家に帰ってから確認してみようかなどと思いながら俺は帰路についたのだ。

家に帰れば当然のように明かりがついている。

また合鍵か…否、ピッキングを使って家の中に入ってきたのだろう。どうしてわかるかって？明らかにこじ開けた様な跡が残っていたら原因なんて確定だ。

ちよつと名探偵に慣れた気分だ。真実はいつも一つ！なーんちゃつて。

冗談はここまでにして、幼馴染が俺に対して遠慮というものを知らないのはよく知っているとつか、もう慣れっ子だった。

鍵を壊されたり、窓の一部が破壊されたりして不法侵入する以外は掃除も料理も洗濯もやってくれるのでとても助かっている。

幼馴染サマサマだ。けれど。合鍵は渡したはずなのだけれど…おかしい。

家に入ると案の定幼馴染がやって来た。

心配させたのだろう目のしたに隈　のように見せかけたメイク　が施されている。

なんて手の込んだ心配の仕様なのだろう。嫌味のつもりだろうか。

「ハレ！勝手に出て行ったら危ないって何回も行つたよね！」

「ただいま」

「おかえり！スツゴク心配したんだよ！」

黒髪黒目のショートカット。今時は滅多に診られない大和撫子である。

彼女の名前は安立彩。<sup>アタチ　サヤ</sup>学生兼陰陽師という特殊な職業を持つ幼馴染。一年前くらいに空巢市の実家に帰り、それから度々やって来る。

日本政府からも超売れっ子の陰陽師であるにも関わらず、彼女はその仕事を休業して俺の世話をしてくれている。

世話焼きが講じてピッキングや不法侵入という犯罪臭いことにまで発展してしまったが、彼女自体は嫌いじゃない。

「ゴメン…気がついたらまた歩いてた」

「最近多いね。悪霊の仕業かな？」

「どうだろう…わかんない」

「アタシが何とかできたらいいんだけど…今、アタシ調子悪いから大丈夫。彩が傍にいてくれれば俺は大丈夫だよ」

「っ！もう！は、恥ずかしい事言わないでよ！もう寝る！」

何が不満だったのか怒って奥に引つ込む彩。

顔が真っ赤だったけど熱でもあるのだろうかと思いながらも俺は自分の部屋に戻った。  
明日の朝に玄関の扉について問い詰めようと心に決めての二度寝に入った。

翌朝、用意された朝食のメニューは焼きシャケとご飯とお味噌汁だった。

今日も彩のご飯は本当においしそうだ。席に着いて、朝食を食べながら扉の事を聞いた。  
彩は少し渋っていた様子だったが、そのうち真剣な表情で語り始めた。

「合鍵が合わなかったのよ」

「合鍵…壊したのか？」

「何でそうなるのかな！？理由によっては殴り飛ばしていいよね？」

何故、怒っている？

まさか…この破壊魔神。自覚がないというのか？と新聞紙が張られている玄関の扉を思う。

俺はちよつと驚いたがいつものポーカーフェイスに戻って会話を続けた。

「いや。その気になれば窓ガラスとか扉のドアノブとか妖怪とか壁とか壊すからてつきり」

「妖怪と窓ガラスを一緒の部類にしないでくれる。……はあ。鍵が付け替えられてたの」

「そりゃお前が壊せば付け替えるだろう」

「知らない間に変わってたの！誰かが付け替えたのよ。知らない間

に！」

「ふーん」

「ふーんじゃない！何とか言いなさいよ！不気味だとか！恐ろしいだとか！そーいう恐怖心はないのお！？」

現在進行形で世話焼き行為をしている奴が何を言うのだろう。

四六時中人型の式 陰陽師が使う基本技術。紙を媒体に使う代わりの目で俺を365日24時間体制で全て監視。

風呂やトイレ以外には全部監視がつく。扉の鍵を替えたらいつの間にか合鍵をつけるかピッキングをして入ってくる。

扉を開かないようにすれば窓を割って進入してくるうえに、変な行動をすればすぐさまやってくるという徹底ぶり。

そのくせ何食わぬ顔で洗濯や掃除や料理をしていく彩コイツに比べたら、鍵が勝手に付け変わっているのなんて全然恐くない。

これを世間では「ヤンデレ」と言って一部の人には愛でる対象らしいが、実際はこんなに鬱陶しいんだ。みんな、騙されるんじゃないぞ。

「いや。全然。むしろタダで変えてくれたんだからいいんじゃない？」

「よくない！全っ然よくないから！」

「防犯に関してならお前がやってくれるから問題ないだろ？」

「えっ？…あ、うん。そ、そうなるかな」

「何か問題…ある？」

「ない…けど…いや。ないよね。そうだよ。私がいるんだから…」

「うん。問題ないなら放って置けばいい。あってもなくてもお前には関係ないんだし」

ダンッ！

彩が思いつき机を叩いたせいで食器がちよっと浮いた。



幸い汁物は飲んだ後だったし、こぼれる心配のあるものはなかった  
為机は無事だ。

が、困った。彩の額にあからさまな怒りのマークが見える。後ろの  
般若の仮面も見える。

どうやらちよつとからかいすぎたらしい。よくコロコロと表情を変  
えるうえに怒りの沸点がよくわからない奴だ。

真実を言っただけなのに何故そんなに怒るのだろうと思いつながらも、  
食事を没収される前に全て平らげて食器を運んだ。

それから怒り心頭の彼女の前で正座をして、三つ指ついて深く頭を  
下げての一言。

「調子に乗ってすみませんでした」

「……今日の晩御飯抜きだからね！」

よかった。昼飯は食べさせてもらえるらしい。

俺はどうでもいいことに安堵しながらも、日常からすでに歪んでい  
る人生をもつと歪める自体が起きるなんて予想もしていなかった。

二度あることは三度あるという。

時刻は朝の１１時。とつくに学校に行っているはずの時間。

授業は今頃三時間目くらいだろうか？と思考しながら俺は青空を眺  
めていた。

小さい頃、幼馴染と来た事がある公園でだ。

俺の名誉の為に言っておくが、決して自分からサボろうと思っただ  
けではない。

冒頭と同じく「気がついたら」この場所にいた。サボろうと思っただ  
けじゃない。

大事な事だから二回言ったんだゾ。日頃から俺はサバタージュする

ような不良ではない。

最近の夜中の事といい。俺は一体どうしてしまったのだろうか  
真剣に考える。

夜中に関してはいつも道で誰かに呼び止められるか歩道される為、  
どこに向かおうとしているのかの検討は全く付かない。

今回はその分目的地が明確だった。「気がついたら」公園のベンチ  
に座っていた。

今までの道筋ももしかしたらココを目指していたのかもしれないが、  
生憎詳しい道までは覚えていないので確証はできない。

次に、この公園に何故来ようとしていたのか？

この公園にそれほど深い思い出などはない。あっても幼馴染と遊ん  
でいた事くらいだ。

他に思い当たる事に心当たりがない。大きな怪我もしたことがなか  
った。

俺に心当たりがないという事は「誰か」の心当たりはあるという事  
だろうか？

「誰か」こと犯人は俺に何らかの恨みを持っていて恨みを晴らす、  
または「目的」を実行する為に俺をココに呼び出した。

とすれば俺の死亡フラグは確定だな。ここに来てしまった時点でア  
ウトだ。

かれこれきつと二時間くらいココにいるが何も起きてない事から不  
気味さはちょっと増す。

一体犯人の狙いは何なのだろうか？

「おい」

「……………びっくりしたあー」

「全然ビククリした顔してないぞ」

突然声をかけられて驚いた。それほどまでに集中していたのだろ  
う。

見れば夜にあったお姉さんと同じ学校の制服だった。腕には腕章をつけている。

この町の自治組織の属している人だというのは一目でわかった。

男の背は俺より頭一つ分くらい大きくて、スラリと長い足がちょっとム力つく。

滅びればいいのに。

顔もそこそこイケメンでダークブラウンの前髪を上書き上げるようなオールバックでどこかワイルドな感じのイケメンだった。滅びればいいのに。

俺を見下ろすな。影で覆うな。ガタイしっかりしてんな。スポーツ選手かモデルかこの野郎。

早く死んで欲しい人種だと思った。以上がこの初対面の男を現す表現である。

「こんなところで何をしている？学校はどうした？」

「そのセリフをバットでそのまま顔面直撃デットボールにしてやりますよ」

「俺は委員長に借り出されてるから仕方なくだ。で？お前は？」

「サボタージュじゃないです。」「いつの間にか」「こんな所にいたんですよ」

「「いつの間にか」で公園に来て、コーヒーを飲むのか？」

「コレは「気がついた」後に買ったものです。疲れたので」「そうか」

男はこんなデタラメな話を聞いても平然としていた。

普通こんな話ウソだと疑うだろう。どいういう神経を持ち合わせているのだ。

男の無知さ加減に呆れながらも、俺はコーヒーを飲み干してゴミ箱に投じた。

思った以上にうまくはいつて小さな満足感を得られたら、この男か

ら離れる事にした。

ここで補導されるのなんて困るうえに彩にバレたらイロイロと面倒になる。

決して逃げるわけではない。この男の為を思つての親切心である事を忘れてはいけない。

うちのヤンデレは俺に少しでも接触してきた他人を容赦なく襲い始めるので他人とのコンタクトは本当に最小限に留めなければならぬ。

なのだが…。

「待て。まだ終わってない」

「俺は終わりました。学校に行きたいので離してもらえませんか？」

「なら俺が学校まで送る。また「気がついたら」別のところに行つてしまつたらいけない」

「それはありがたいですが……お仕事は？」

「町の護りが俺の仕事だ。これも仕事のうち。何なら俺が先生に何とか言つてやる」

「それは助かります。俺が変な所に行きそうになつたら止めて下さい」

考え直した。こんなイケメンは早くいなくなつてしまつた方が世のブサメンの為だ。

彩が始末してくれる事を心から願つて同行を求めれば、気のいい男はすぐに了承して歩き出した。

「俺は<sup>オオカミ</sup>大神要だ。高校二年」

「晴智晴之です。中学三年生。来年、貴方が行つてる高校を受けます」

「後輩か…気の毒に」

「学校嫌いなんですか？」

「嫌いだな。歩くだけで女子は叫ぶし、男子からは地味な嫌がらせされるうえに教師からの嫌味攻め。うんざりするな」

「改めて貴方に殺意が湧きました」

「唐突に毒舌だな」

しまった。つい本音が漏れてしまった。

後半二つはともかくとして女子に人気なののがいけないというんだ。

俺なんて彩以外の女から声すらかけてもらったことがない。うえにかけられないのに。

あつ。いや…この前初めて彩以外の女子と話をしたけれど。職質だったが。

「大神先輩のところに黒くて長い髪の子の知り合いとかいますか？」

「コウサカ神坂の事か？」

「コウサカ？」

「空巢町内に住んでて知らないのか？空巢町風紀委員の委員長。神坂かぐや」

「この町は風紀委員によって守護されてるんですね。警察は役立たずだなあ」

「役立たずって事はないがやる気がないのは確かだな。おかげで犯罪の発生率は全国で少ない方だぞ」

「そうなんですネ。世の中の事とか全然興味がないので知りませんでした」

「みたいだな。アイツの前で犯罪行為をしたら容赦なく木刀で殴り殺されるから注意するように」

「わあ。暴力によって生まれる平和のなんと空しい事かー」

「同意見だが棒読みで言っても誰の心も動かせないぞ」

この町の平和が一人の学生の武力によって保たれていた事にちよつとした不安を覚える。

大丈夫か空巢町。大丈夫か今後の日本。不安が多すぎてこれじゃ年越せないかもしれない。

まあいいや。自分が住んでいる範囲、生活する範囲、見ることができる範囲で面倒事が起きなければ今この瞬間誰がボッコボコにされていようが気にする事ではない。

どうでもいい事を考えていると、携帯のバイブに気がついた。長さからしてメールみたいだ。開いてみればメールが50件ほど入っていた。

内容も差出人も全部同じ。安立彩からだ。まあそうだろう。俺が先に出たはずなのにまだ学校についてないとわかれば慌てるに決まっている。

陰陽術だつて搜索範囲に限界がある。今の俺はその搜索範囲外に出てきているから彩はメールを送り続けている。

『今どこにいるの？返事下さい。大至急』

いらない心配をかけたようだ。とりあえず返信するとすぐに返事が返ってきた。

最近の子供は返信が早いなあと爺臭い事を思いながら文面を見る。

『隣にいる大男は誰？』

おっと。どうやらこの辺は彩の式が活動できる範囲内らしい。

もう大神の事に目を付けられた。俺的にはこの男がどうなるうと構わないので当たり障りのない文章を打って返す。

『町の風紀委員の人らしい。俺を学校まで送ってくれるそうだ』

送信。ブブツ。受信。

『ダメだよ。その人はダメ。絶対に連れてきちゃダメだよ。ハレ！』  
『何で？』

送信。ブブツ。受信。

『その人は何かに憑かれてる！ハレが近寄ったら危ないし、この範圍だと私は手出しできないよ！離れてハレ！』

「……は？」

「どうかしたのか？」

「……いいえ。何でもないです」

彩は陰陽師だからわかる何かがあるのだろう。

生憎俺には幽霊も妖怪も見えないし、出会ったこともないので確証は得られないままだが彩が日本屈指の陰陽師である事は認めている。故に妖怪や幽霊の存在は信じている。摩訶不思議な存在がこの世の中にはいるのだろうという事はわかっていた。

しかし、隣にいる男からは俺は何も感じない。本当に『何か』に憑かれているのか？

憑かれていたとして、俺に何の危険があるのだろうか？

『憑かれてるって何？俺、もしかしてピンチ？』

送信。ブブツ。受信。

『今は大丈夫そうだけど、早く離れる事に越した事はないよ！離れて！早く！』

「メール打つの早いんだな」

また突然影が覆った。大神が携帯の画面を覗いていた。俺はつい携帯を隠した。メールの内容なんて他人に見られるほど恥ずかしいものはない。

何にしる変な疑惑が上がった以上、警戒する事に越した事はないと思った。

「恋人か？」

「幼馴染です。100件くらいメール来ててびっくりしました」

「それはもうストーリーカーの域だろう？」

「すーとかー？何ですかソレ？別に普通ですよ。」

メールの100件や200件くらい当たり前じゃないですか？

俺の方が先に家を出たのにまだ来てないって事は心配してこれくらいメール送る事だってありますよ」

この言葉に大神はあからさまに表情を歪めた。

この行為の異常差に対して今更何を驚く事があるのだろうか？

まあさすがに今回は心配させすぎたなあと反省していたから後で何か機嫌を直す口実を作らなければくらいしか考えていない。

こいつの重度の世話焼き症候群の何か異常だというのか？

「……幼馴染とやらは他には何かしてないのか？」

「他にはって？」

「家に勝手に侵入したりとか、部屋の中に盗聴器とか仕掛けたりとか」

「後者はわかりませんが、前者は日常茶飯事…っていつか毎日ですよ。」

扉の鍵付け替えてもどこか壊して入って来るのもう合鍵を渡す事になっています」

「おかしいと思った事は…変だと思った事はないのか？」



「アイツの世話焼きはずつと昔からあぁなんですよ。俺が事故にあつてからちよつと度が増したような気がしますけど…変だとか思つた事は一度もないです」

大神の顔がさつきより険しくなった。

イケメンが怒ると迫力あるなあなど思いながらも、俺はちよつと逃げるように歩を進めた。

大神の顔が恐いのもあつたが、同時に不安になった。だから逃げた。俺はおかしいなんてこれっぽっちも思っていない事がおかしいと言われているようだと思つた。

「おい。晴智」

「な、何です……か？」

俺は大神の声に釣られて後ろを振り向いたはずだった。

たった数歩しか離れていない距離で振り向けばあの大男が険しい表情をして立っているはずだった。

けれど、振り返つた先に大神の姿はなく夕焼けに沈む果てのない道路しかなかった。

「大神…先輩…？」

真つ赤な夕日が周りを赤く染める。

幻覚でも幻でも白昼夢でもなく、俺はそんな空間に立っていた。

状況 1

浮浪する少年？（後書き）

初めまして初投稿の春寝暁<sup>ハルネ アキウ</sup>です。

オリジナル小説は初投稿なので、皆さんが楽しんでもらえたらとても嬉しいです。

更新はかなりまちまちになるとは思います。精一杯頑張ります。

## 状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年？

あたり一面が真っ赤だった。

それが夕日に照らされているからか、辺りに充満する卵が腐ったような匂いがする素が原因なのかはわからない。

けれど、少ない判断状況から俺は変なところに迷い込んだと悟った。携帯で確認した時刻はまだ朝の11時頃だった。

夕焼け空にしても早すぎる。弁当だって食ってないのに理不尽ではないだろうか。

こんな世界に来て弁当の心配をする自分に呆れながらもとりあえずは進む事にした。

「しかし……ここはドコなのだろうね。一応町内っばいけど何か違う感じがするし」

人の気配が全くしないどころか人っ子一人通らない。

一応自分は外にいる。いくら人気がないと言っても、この場所はあるにも静か過ぎた。

音も気配もないゴーストタウンをしばらく歩いて行くと、コンビニの前に来た。

ガラスの向こうには誰もいないし、何もない。店員も商品も雑誌さえもない。

あったとしてもココにある食料はあまり食べたいとは思わない。

俺が探したのは公衆電話だ。コンビニの前にある小さな公衆電話。小さな白熱灯が点滅を繰り返すボックスの中に電話はあった。

財布から小銭を取り出して、彩に電話をかける。他に電話をかける人間もいないし、仕方がないだろう。

プルルルル…プルルルル…

繋がった！

これで連絡が取れればどうにかなるだろう。

『はい…もしもし…』

「もしもし？彩？」

『お腹…空いた』

「彩？」

『お腹空いた…お腹空いた…お腹空いた…お腹空いた…』

『……食べて…いい？』

ガチャン！！

「ダメに決まってるだろ！」

明らかに異常な環境の中、明らかに異常な電話に対して俺はツツ  
コミを入れた。

ダメだ。この電話は使えない。あれは冥府への公衆電話な感じがす

る。

ソレを思うと恐くて電話ボックスにはもつと入れない。後ろにベチヤとかグチャとかしたものがいたら悲鳴は上げないがきつと気絶するだろう。

自慢じゃないが俺はグロ系は無理だ。ホラーなら大丈夫だけどグロいのは無理！

どうしよう。かなりヤバいところに迷い込んでしまった気がする。俺はカバンを両腕で抱いて、恐怖を抑えようとするがあまり意味はない。

「ついツツコミを入れてしまった…俺もあのお姉さんの事言えないな」

何て暢気な事を言ったが、現状は変わらない。

携帯も通じない。公衆電話は冥府へと繋がっている気がする。大神とも離れた。

さあ。この状況をどうやって切り抜けようと考えながらも足は止まらない。

今はとにかく「人間」に会いたかった。

またしばらく歩き続けるがやはりどこまで行っても人影一つ見当たらない。

どこまで行っても住宅地、赤い夕日、電柱などに映る影、影、影の無限ループ。

ちよつと絶望しそうだ。頼む。誰か誰かいらないか？

「……も、もしもーし」

耐え切れずに誰もいない町に向かって、小さな声で呟いた。

大きな声でこれを街中で言うのはちよつと勇気がある。そんな勇気は俺にはない。

小心者と笑うがいいさ。お前達に俺と同じ状況に立って同じ事ができるならな！？

「はぁーい」

「えっ…。今どこ？」

「ココだよ。ゴミ箱の中」

「ゴミ箱？」

かくれんぼでもしているのだろうか？聞こえたのは小さな子供の声だった。

ある団地の外側にあつたダストボックス。蓋を開けば確かに声の主はいた。

可愛い顔をした女の子だった。年頃的には幼稚園児くらいの子供だった。

「だった」というのは少女の首から下はすっかりなくなっているのにも関わらず、少女はゴミ箱の中で笑っていたからだ。

「……………」

「お兄ちゃん。見つけてくれて有難う！」

「どう…いたしまして」

「あつ。でももう一つお願いがあるの」

「何？」

「身体を探して欲しいの。きつとどこかを彷徨つてると思っただけど」

「……へえ。そっかぁ。この世界は肉体と頭が離れても彷徨えちゃう世界なんだ」

「異世コトヨだもの。当然だわ」

異世。それがこの世界の名前。

イロイロ狂った何かが蠢く世界の名前。

誰がそう名付けたかは知らないが言いネーミングセンスをしていると思う。

俺は首だけ少女にお別れを言つと静かに蓋を閉めて、ゴミ箱から走って逃げた。

身体探してって言われたけど無理に決まってんじゃん！っていうか何で首チヨンパされて堂々としていられるわけ！？意味わかんない！！むしろソレが当たり前ってどういう世界なんだマジで！？

頭が混乱する。どうすればいいのかわからずに目的地もなくただ我武者羅に走り続ける。

とにかく走った。風のように。疾風のごとく。真っ直ぐ真っ直ぐ一直線に。夕日が傾く道を走る。

どこまでも、どこまでも、どこまでも同じ景色が流れる気がしたが道に終わりは一行に來ない。

もしかしたらずっとこのまま夕日が傾く道に取り残されて一生を過ごすのだろうか。

「そんなの…嫌だ！俺は帰る！帰りたいんだあ！！」

誰もいない無音の町で一人の少年の叫びが木霊した。

俺は疲れ果てて道端に座っていた。

ああ。ダメだ。なんて名前だったか忘れたけど犬…俺はもう一步も歩けないよ。

せめて最後に彩の弁当が食べて、家でダラダラして、ベッドの上で死にたかった。

大往生は憧れだ。自宅の布団の上で死ぬるなんて最高じゃないか。

まっ。こんな異世界では関係のない話だ。俺は道端に蹲り、さっきの少女のように首と胴がお別れした状態でゴミ箱に放置される運

命なのだろう。

大きな溜息をつきながら道端に蹲る俺は、なるべくスペースを取らないように座り込んだ。  
その時…。

「ねえ。貴方…大丈夫？」

「ふへ？」

「あらあら…酷い顔。こっちにいらっしやい」

声をかけてきたのは40代くらいの女性だった。

優しそうな面持ちで俺の手を引く。不思議と恐いという感覚はしなかった。

何でだろう？俺の感覚が麻痺して来たとか？これが天からのお迎えとか？

ああー……事故のショックか母さんの思い出ってあんまりないからよくわかんないんだけど、母さんがいたらあんな感じなのかな？

俺は手を引かれて、公園にたどり着いた。

公園はさっき俺がいた公園だった。家の塀ばかりだと思っていたがちゃんと公園はあった。

女性は公園の水道でハンカチをぬらすと俺の酷い顔を拭いてくれた。

「あ、あの…」

「何？」

「すみません…ご迷惑かけて。有難うございました」

「いいのよ。それよりどうしてこんな場所に？ここは人が来るような場所ではないわ」

「やつぱり…そうなんですね。でも出口わかんなくて…」

「簡単よ。帰りたいって思ったらここからは出られるの。そういう空間だから落ち着いて心の整理をしなさい」

「帰りたいと思ったら…出られる？」



では今まで出られなかったのは帰りたいと思う気持ちが必要なかったから？

それとも俺自身が帰りたくないとかどこかで望んでいたからか？  
そうだ。あの時俺は、大神に変なことを訪ねられてここにいたくないと思った。

大神とこれ以上話したくなかった。だから…俺は…。

「この世界に引き込まれた？」

「心当たりがあったようね。ならもう出られるわ。大丈夫。

誰に何を言われても貴方が貴方であることは変わらないのだから。  
自信を持ちなさい」

「……はい。有難うございます」

「もう大丈夫？しつかり歩けるかしら？」

「はい。歩けます」

「ならいいの。頑張つてね」

俺が大丈夫だと言ったのに安心したような表情を浮かべて彼女は俺から離れていく。

「ちょっと！危ないですよ！貴方も一緒に……」

俺は手を伸ばす。この世界に来て優しくしてくれた彼女に触れようと手を伸ばしたはずだった。

しかし、手は何もつかめない。何も触れられずに彼女の身体を通過して彼女は消えてしまった。

まるで初めから誰もいなかったように消えてしまった彼女。

アレは俺が見た妄想の産物なのか、はたまた狂った世界の住民だったのかは定かではないが気を取り直す事にした。

シャ      コ

気持ちを新たに駆け出したいと思った。

こんなところで死にたくない。死ぬんだったらベッドの上か布団の上での大往生だ。

シャ      コ

後ろに聞こえる不気味な音は無視して進もう。

ただし足は早足だ。競歩に近い速度で風のように…。

ヒュッ！という何かの音と共に俺の隣に大きな鋏が刺さった。

「な…んだってんだよ！チクショー！！」

俺は全速力で走り出した。

後ろからは俺を追ってくる足音。ヒタヒタという音から相手は素足だ。

一瞬しかみなかったのだからなかったがあの鋏はやろうと思えば人の首くらい簡単に切れた。

理解した。アレが少女の首を切った凶器であると悟った。

それをやった犯人が後ろから俺を追いかけてきている。

逃げなければ冗談抜きで死ぬ。あれ？もしかしてさっきのおばさんはこれがわかって俺より先に逃げた？

まさか！あんなに優しくしてくれたおばさんがそんな事するはずないじゃないか！！

いや、でも…可能性が完全に否定できないのが何か悲しい。

人間ってかくも薄情な生き物だったのだと、今するべきではない人生の心理を一つ習得したところで足を何かに掴まれた。

俺はそのまま地面に激突。それはもう漫画のように顔面を地面に強打した。

痛む顔面を押さえながら俺の脚を掴んだモノを見て、絶句し後悔した。

「ソレ」もまた人間だった。「だった」というのは前と同じような意味だが、今回は逆だった。

歳はさつき出会った少女と同じくらいの年頃なのだが、今回は少年だった。

ただ少年には顔が判別できる頭が付いておらず、胴体だけ。しかも沼地から上がってきたようにドロドロになった身体で俺の脚にしがみ付いていた。

昔見ていた ケモンに出てくるヘドロに抱きつかれるとしたらこんな感じかと思ったが、右足にへばりつく微妙に生暖かい少年（身体のみ）は俺の脚を地面にどっぷり嵌るように縫い付けた為、押しでも退いても足は抜けなかった。

そんな事していると右腕にも違和感を感じた。恐る恐る振り向けば次は少女の身体。

これはさっきの女の子のものかな？と思ったが俺は捕まる前に振り払う。

そのうち数が増えてドロドロになった頭のない子供たちが俺の身体を覆って固める。

自由が利かない。逃げられない。そのうち素足の人物の姿も見えた。

「ハ、ハハ…ハハハハ…何だよ。ココには赤の女王様でもいんのかよ」

俺の身長くらいあろう大きな鍬を持った人物は大神以上の大男だった。

大柄のガタイを覆うのは真っ赤にそまったコート。元の色が何なのか区別なんて付かない。

そして、案の定男の肩から上は存在しなかった。彼は、彼もまた「



リタイノ

「ダカラ……」

首ヲチヨウダイ

止めてくれ。そういうの。つい頷いてしまいそうになるから。

かといって俺に逃げる術はない。ガツチリ固まって逃げられない俺の首に銀色で刃が赤く染まった鍔が添えられる。

ゴメン。彩。布団で大往生の夢は叶いそうにないし、昼飯も一緒にできそうにない。

お前がヤンデレ属性なのは知っているが、くれぐれも後を追いかけてこないで欲しい。

あの世までお前のお人好しされるのはいくらなんでも罪悪感がハンパない。

きつと届いていない遺言を頭の中でプレイしていたその時…。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ  
ッ！

俺の周りに火花が飛んだ。

首も固定されているので周りは見渡せないが、撃たれたのは明らかに銃だった。

銃声が終わった後、入れ違いに黒い影が現れた。

腰に二本の漆黒の太刀を収め、そのうちの一本を以ってして大男と対峙している少女。

それなりに距離が離れていたであろうところから、一瞬で距離を詰めて男の懐に入り込んだ。

俺の腹を思いつきり踏んで。

「はい。魔法少女デス！」

白銀に煌く太刀の刃が大男を切り割いた。

「ゴフッ！」

俺はうめき声を上げた。突然、腹に押し掛かった重力によって…だ。

そんな事を気にせず、少女は、自称魔法少女は、男に切りかかっていった。

斜め上からの袈裟切り。刃は確実に男の心臓を斬った。

男はそのまま地面に倒れ込む。それを見越した魔法少女はまだ太刀を振り上げて、男の死体を滅多刺しにしまくった。

「ゲホッ…ゲホッ…！」

「大丈夫ですか？手をどうぞ」

駆け寄ってきたのはオレンジ色のような髪色をした青年だった。年齢的には大神と近い。とても物腰が穏やかな青年は俺の手を取って起してくれた。

いい人そうだと思う。子供なんかは進んで近寄って来るだろう。片手にサブマシンガンなんて持っていなかったらの話だが。

「あ、有難う…ごじます…」

「どういたしまして。俺は御剣鍊弥<sup>ミツルギレンヤ</sup>。君の名前は？」

「晴智…晴之…あの」

「何ですか？」

「柄の事…お聞きします…けど…人間で…いいんですよね？」

「はい。僕達は正真正銘人間ですよ。辛かったでしょう？もう大丈夫ですからね」

俺の頭を優しく撫でる鍊弥の手にちよつと泣きそうになった。  
ちゃんと人間の暖かさを持った手だった。それが嬉しくて泣きそうになる。

恥ずかしいからそんな事は絶対にしないが、今はその手の暖かさを感じていたくて鍊弥の手を握った。

「つたく…何で情報が入って来ないんだよ。」

欠けた死体が出た時は知らせるってハゲ医院長には耳タコできるほど言っただのに！！」

ちよつと我俣を言わせてもらうなら怒りに任せて男の死体を滅多切りにする彼女の声や肉を切り裂く音がしなければもっとよかった。やがて満足したのか、彼女は戻ってきた。

顔に飛んだ返り血を袖口でふき取り、俺を睨みつける。

「僕は、御剣<sup>ミツルギ シノブ</sup> 忍。君は僕達『鴉』が保護する。拒否する事は許さない」

「『鴉』？」

「覚えていなくていいですよ。ココに出て記憶処理を受けたら忘れてしまう事ですから」

「は？何？記憶処理って…何？」

「いいから。コレ付けて。黙って僕達に着いてきてくれないかな？」

この後、病院の医院長シメて来ないといけなから。早くしてくれる？ノロマ」

渡されたのは銀色のアクセサリ。チェーンで出来た腕輪だった。先に変わった形の飾りがついているが言われたとおりにつけるとかなり安心感が出て来る。

何かのお守りなのだろうか。いや。そんな事よりもだ。

「あの…御剣さん？」

「ですか何？」

「すみません。鍊弥さんの方です」

「チッ。紛らわしい真似すんじゃないよ」

「どうかしましたか？」

「いえ。その…もうあの首なし鋏は出てこないんですよね？」

俺達は助かったのか？と暗に聞いたつもりだった。

その質問に対して鍊弥は微妙な表情をする。まさに苦笑と言ったような表情だ。

「残念ながら…しばらくしたらまた復活するでしょう」

「マジ？」

「ああいうのは早く滅してしまいたいのには山々なんですけど…恨みが深いまま強制的に滅してしまったら浄化にかなりの時間を食うんです」

「それって…魂の浄化的な奴ですか？」

「そうです。なのでああいうのは封印してしまうか、時間はちよつとかかりますが恨みを解消させるという方法を取らないといけないんです」

「じゃあ封印すれば良くないですか？」

「だったら君がなればいいんじゃない？君が、アレを封印するための人柱になれば万事全てはうまくいくけれど死にたいの？」

「……ごめんなさい」

自称魔法少女こと御剣忍には頭が上がりないと思った。

つまりは二人はあの男を無事に成仏させる為に男の首を捜していた。彼を納得させる為、自分の失くした部位を、欠けた部位を見つけ出す為に探していた。



それは元の世界のどこかに落ちていて、彼らはそれを探す為に行動していたという。

「それで…どうして俺を？」

「たまたまだ。僕達がたまたま異世に入って見つけたのがお前。ただそれだけだ」

「たまにいますですよ。こういう「存在するだけ」の空間に迷い込んだんじゃう人。」

この世界は何の目的もなく、ただあの男が首を刎る為だけに生まれた世界。

俺達がココに来たのも首を見つけるヒントがあるかもしれないっという思いつきだけですから」

「存在するだけの世界？」

「細かい事聞いたってわかんないと思うからこれ以上の説明は却下する。」

以後、許可なく口を開いたらその首を刎ね飛ばすから注意するよ  
うに。以上」

「（なんて横暴な…）」

「忍ちゃんカツコイツ！もっと言って下さい！」

「当然だろ。兄貴」

「（なんて残念な…）」

顔を赤らめて妙な動きをしながら妹（仮）を賞賛し続ける兄（仮）に失望した。

さっきまでの優しそうなお兄さんはシスコンでMだった。

でもって、カツコよく俺を助けてくれた少女は魔法少女でSだった。

そんなやり取りに溜息をついたら肩の力が少し抜けた。

ちゃんとした人間のやり取りを見てここまで安堵したのは初めてだ。人間一度は体験すべきだろう。こういう小さなことを俺は大事にしている。

そんな思いを胸に抱きS Mプレイチックな会話を聞きながらも、異界から出ようとした時だった。

「鍊弥さん？忍さん？」

二人の動きが止まった。

二人の影から二人が見ているモノを見た時、俺の動きもまた止まった。

『首…ヨコセ』

さっきの奴が立ちはだかっていた。

状況 1

浮浪する少年？（後書き）

二話です。遅くなって申し訳ないです。

プロト通りなら兄妹はもうちょっと後だったんですけど予定を変更しました。

誤字脱字報告や感想をお待ちしています。

## 状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年？

「首」のない男がそこにいた。

大きな鋏を持つて、夕日に背を向けて俺達の前に立っていた。ここまででは一本道だ。割り込める場所なんてありはしないのになんて男が目の前に立っているのだろう。

そんな事を考えていると鍊弥と忍は御互いの武器を持った。

「兄貴はそいつを頼む。アレは僕がひき付ける」

「でも、忍ちゃん一人じゃ……！」

「チャームもあるし、しばらくは大丈夫。適当に始末したら別ルートから現世に出る」

「できるのか？」

「「できる」「できない」じゃなくて「やる」の。僕だってこんな所で死ぬわけには行かない。

っていつか素人がふざけた事言うならアイツに首やるから」

「……イエス、ママ」

「忍ちゃんを一人になんて……そんな……」

鍊弥はかなり悩んでいるようだ。

ちよつと見ただけでも忍を物凄く大事にしているのがわかる。

だからこそ、こんな世界に最愛の妹を置いていきたくないのだろう。俺だって嫌というほどこの世界の異常を体験し続けている。こんな所に彩や両親が迷い込んでしまったらと考えるとぞつとする。

俺なら意地でも連れて帰る。彩が何と言おうと絶対手を引いて帰る。そんな気持ちを今彼も思っている。ちよつと言動に難ありだが……いい人という認識は変わらなかった。

「そんな羨まつ……危ない事をさせるなんて！」  
「おい」

「羨まつ」って何だ。羨ましいって。

この状況が？それとも妹と二人つきりでいられる事か？

「はぁ…兄貴の頭の中で僕はどうなっているんだろう？」

「もちろん！口では言えない感じに！」

「アンタ最低だー！」

俺の口は反射的にツツコミを入れた。

ダメだ。この人。常識人だと思ったらムツツリシスコンだった。

いや、これはオープンなのか？異常な状況の中で自分の欲求を素直に暴露する事ができる彼はある意味オープンなのかもしれない。

「だって！あのハサミで制服とかボロボロにされちゃったりとかしたりとか！」

さっきのベツチヨリでエロい事されたりとかしちゃったらどうするんですか！？」

「この非常時になんて事言っただ！」

「では君はうちのカワイイ忍ちゃんのカラエ口を見て興奮しないとも言っんですか！？」

「ソレとコレとは別問題だ！俺はそれを安全地帯で見ていたい！」

忍のスタイルは抜群によかった。制服はこらじゃ見ないのでわからないが出る所は出ているし、まな板な彩の胸よりもかなりある。大きすぎず小さすぎずの調度いい俺好みのサイズだ。顔もかなりいい。モデルのようだ。

そんな美女のエロシーンが見られるのなら堪能したいに決まってい

る。

が、それは安全地帯での話。もしくはテレビなどの画面の前などがよかった。

あつ。いっけね。家で見ると彩に殺されるわ。希望を変えよう。

「安全地帯で生で見たいです！」

「でしょう!？」

「……このバカはいつまでやっているつもりなのかな？」

「バカな事はありません! とってもレアで貴重なチラエロシーンの撮影についてです！」

「そんなシーンは絶対に来ないから安心していいって」

「来る事に期待した男の気持ちがお前にはわからないのか!？」

「むしろ非常時に後ろを見てそんな事を言っている余裕があるお前達を見て呆れるべきか感心するべきかという気持ちに悩むけどな」

後ろ？

振り返った事に俺は後悔した。

これから俺達が行こうとしていた退路から這い出している小さな手。ほの暗い沼っぽいところの底からさっきの奴等が這い出てきていた。

あつ。ヤバイ。バカやりすぎた。

「ヘルプです。鍊弥さん」

「ええ！」

「わかります。気持ちは凄くそんな感じですけど…俺恐いです。身の安全は確保したいんです」

「仕方ない。………おにーちゃん」

「はあーい! 何ですか? 忍ちゃん」

驚きの変わり身の早さだった。  
どっちがって？どっちもだ。

「僕、今からスツゴク頑張りたいんだけどー。お兄ちゃんに血生臭いところ見られたくないの」

「お兄ちゃんはそんな事にしないよー」

「僕が嫌なの。だからだから、その雑魚を連れて先に戻ってお風呂の用意しといて欲しいんだ。ダメ？」

「わかったよん！先に言ってお風呂と食後のアイスの準備もしくよ！」

「わあーい！お兄ちゃんだーい好き それじゃ回れ右してGO！」  
「はあい！」

物凄く嬉々とした笑顔で俺の首根っこを引っつかんだ鍊弥は人形が群がる前の道路を駆けて行った。

兄の変わり身はきっと素だろう。シスコンの名は伊達ではなかったが忍の妹演技の技もなかなかのものだった。

それにちよつと胸を打たれてしまった自分は変態ではないと信じたい。

今はとりあえず…。

「れ、鍊弥…さん………苦しい」

首元の部分を引っつかまれて、俺は息が出来なくなっていた。

鍊弥の後をついていくような感じで夕暮の道を走り抜ける。  
その途中、鍊弥がハンドガンで何発か胴体を撃ち殺しながらだが、

さつきより数は随分と減っている。

出口までどれくらいあるのか全く予想がつかないが、彼といれば当面の安全は心配ないだろうと判断した。

それにしても普段着のような軽装備のどこに銃器を仕舞っているのだろうというどうでもいい事を考えていた。

「随分と余裕が出てきましたね。迷い込んだにしても、来ちゃったにしても上出来です」

「他にもこういうのってあるんですか？」

「ありますよ。この世界：異世は異常でしょ？だから、迷い込んだ人も来ちゃった人も大抵精神の方がイっちゃってる人が多いんですよ」

「わぁ…それは大変だ」

発狂したり、精神異常者を元の場所に連れて帰らなくてはならないというのは相当な苦勞だろう。

場合によっては反抗し、襲い掛かってくる可能性だってある。

今回のような防衛の事もあるが、二人が剣術などを心得ている理由がよくわかった気がした。

そついうのから比べれば俺は比較的楽な救助者なのだろう。

「二人はどうしてこんな仕事を？」

「御剣家の勤めです。俺達『鴉』は異世を封じたり、さつきみたいな化け物が人に害をなす前に片付ける。

それが、僕達に与えられた役目です。人命救助はあくまで見つけられたら…ですね」

ほとんど手遅れというのが多いのですが…と鍊弥は少し困った顔をした。

まあ。確かにそうなのだろう。俺だってあのおばさんがいなかった



らヤバかった。

それを救助してくれるのだというのだから「記憶処理」というのもその一環なのだろう。

誰だってこんな場所覚えていたくはないし、入りたくないと思う。

「先祖代々の仕事って奴ですか？」

「まあ……。そんなところですよ」

「へえ。じゃあご両親もそんな仕事を？」

「どっちも行方不明なんでわかりません」

地雷を踏んだ。俺のバカ。

話題を変えなければと思考を切り替える。

「すみません。……お仕事とかはこれで稼いでるとか？」

「いえ。コレに報酬は出ませんよ。政治的にも非公式ですし、今の新しい町長さんも知らないと思いますよ。

主な収入源は神社の仕事と………ちょっと危ない貿易業？」

「……………それって白い粉的な」

「いえいえ！そんなものは全然！まあチャカとかハジキとか良く切れる包丁とか。そういう台所用品ですよ」

輝かしい笑顔で鍊弥は言った。

その「台所用品」というのは何を調理するものなのだろうとか。チャカ？ハジキ？どこかで聞いたことがある専門用語ですねとか。ツツコミ所が多すぎたけれど俺は頑張って口を閉じた。きつとツツこんだら最後俺の命は風前の灯だ。

どうやらこれも（俺にとっての）地雷だったらしい。どんだけ話辛い兄妹だこいつら！！

「すみません」

「いえ。お気になさらず。晴智君のご両親は？」

「俺の両親は海外に赴任中……らしいんです。俺、最近交通事故に会ったらしくてその辺の記憶が曖昧で」

「交通事故？記憶喪失になるほど酷いものだったのですか？」

「事件の事は思い出さないほうがいいって彩……幼馴染が教えてくれないんです。」

気がついたら幼馴染の家の布団で寝てて………幼馴染が馬乗りになっていました」

王子様は目覚めのキスで目覚めるのだとか訳のわからないことを言って馬乗りになっていた彼女を一瞬のスキについて関節技コブラを決めたのは記憶に新しい。

「何ですか。その男に嬉しいラブコメイメント」

「違います。法に背く性犯罪です」

「いいじゃないですか。安立さん。カワイイですよ。ちょっと痴女入ってますけど」

「知ってるんですか？」

「お得意様ですから」

これは問い詰めなくてはならない。

逃亡中ながらも俺は鍊弥の手を取りこっちに顔を向かせ、両肩をガツチリガードした。

今の形相はきつと凄まじいものがある。小学生くらいなら泣かせる事だって可能だろう。

でも仕方がない。何故なら俺の命と貞操がかかっているのだから。

「何を買ったのか教えてもらえませんか？」

「守秘義務があるので詳しい事は。大丈夫です。危ないものじゃありません」

「何を根拠に大丈夫だと！？っていうか痴女だってわかって何故危険な物を売る！」

「商売ですから。その結果、どこの誰かがどうなろうとぶっちゃけ知ったこっちゃないっていうか？」

「この外道！」

「さいっこのうの褒め言葉。有難うございます」

「チクショー！通じねえ！」

通じない上に救いようがない。

どうやら見誤っていたようだ。こいつはMなんかじゃない。腹黒いんだ。

Mの演技はしちやいるが喜んじやいない。地雷踏んだだけ踏み返してきやがった。

何でわかるか？こいつの笑顔が喜んでるように見えないどころか、顔に書いてあるもの。

「おとといきやがれ」って！！さすがちょっと危ない貿易業してるだけあるわなあ！！

「まあまあ。落ち着いて」

「これが落ち着いていられるかあ！」

「大丈夫ですって。彼女がウチから買ったのは退魔道具ですから」「退魔道具？」

「うちはそういうの「も」…いや。違いますね。そういうの「を」作る工場なんです。

こっこの事件に当たっている日本全国や世界中の退魔師、陰陽師、悪魔祓い達の商会から注文を受けて届けに行きます。

例えば俺の銃や忍ちゃんの手刀みたいな、怪異にダメージを与えられる武器の製造を行うのが「御剣神社」の存在理由なんです。

その関係で武器や装備品を降ろすのに裏…ちよっとコワモテなおじ様達との付き合いが出来て、料金と引き換えに武器や退魔装備と

交換したりなんかやっております」

「あ……ああ。その関係なんだ」

そういえば彩が言っていたような気がする。

竝肩にしている退魔道具を売っているところが近所にあると。それはどうやらこの二人がやっている神社だったようだ。

「貴方達は何者ですか？」

「魔法少女とその兄です」

「…………束の事をお聞きますが魔法「少女」設定を押したのは貴方ですか？」

「ご想像にお任せします」

その顔は腹黒モードの笑顔ではなく、シスコンモードの笑顔だった。

真実はいつも一つ。俺は犯罪者を見る目つきで命の恩人鍊弥を見下した。

御剣兄妹の認識を一転、二転くらい改変したくらいの時間が経った。

妹はともかく。曲者の兄が原因で俺はちよつと疲れていた。

彩が買った詳しいものは教えてくれなかったが、冷静になってみれば商売をしているのだから顧客情報の流出はダメに決まっている。

どの辺りが退魔道具なのか、どんなアイテムがあるのかは聞かないが一応買われた物を総計しても特に危険なものは入っていないと鍊弥は言った。

今はその言葉を信用するしかない。俺の精神状態の安定の為に。

「この空間は出ようと思えば出られるんですね？」

さっきのおばさんはそう言った。俺は帰りたいと強く願いながら行動していたつもりだ。

しかし、兄妹に会うまでここから出られてはいない。鍊弥は質問に対して首を縦に振った。

「そうです。帰りたいと思えば帰れるに貴方は出られていない。それは貴方が帰りたくないと思っっているからでしょう？」

「帰りたいに決まってるじゃないですか。こんなところいつまでも居たくない」

「では理由がわかりません。首<sup>アレ</sup>なしが貴方を引き止めようとしているのか。」

それとも別の何かが引きとめようとしているのか…ではないでしょうか？」

「別の何かって…」

「例えば目の前にいるご婦人とかね」

鍊弥が両手に銃を持った。俺も釣られて鍊弥の先を見る。

鍊弥のいう「ご婦人」はいた。先程のおばさんだった。

俺を勇気付けてくれた優しいおばさん。そうだ。あの人の事を忘れていた。

どうやって現れたかは知らないが、おばさんを連れて帰らなければと俺は思い、鍊弥の腕を掴んだ。

「ダメです！あの人は俺を助けてくれました！」

「怪異は人を助けませんよ。それは何かの間違いです」

「どうして！？あの人が生きてるかもしれないじゃないですか！」

「撃ってみればわかります」

「撃ったら死んじゃ…」

ドンッ！

一発の銃弾がおばさんの胸を貫いた。

信じられないと目を疑った。何のためらいもなく生存の確率がある人間を撃った。

さらに片手にサブマシンガンを持って、ハンドガンと共に撃ち続ける。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ  
ダダダダダッ！

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

容赦なし。手加減なし。慈悲なし。無駄玉もない。位置も全て正確に致命傷を狙う。

そして、銃をぶっ放しながら彼は笑っていた。

おばさんは見事に蜂の巣になっていた。アニメの影絵をみるように身体には夕日の光が差し込んでいた。

ああ。完全に貫通したのか。と俺が静かに悟った時、激しく嘔吐した。

「…うっ」

朝食は消化されてしまい出ては来なかったが、とりあえず吐きかけた。

彼女が死んだ。完全に。アレは絶対に生きていない。死んでいる。

人の死を初めて目にした俺はそのグロさに思わず参ってしまった。  
わけた。

「俺、異世であつた人か怪異かわかんないものはとりあえず撃つて確かめる主義なんです」

「さい…あく！俺も撃たれてたつて事かよ！」

「あの時は忍ちゃんがいきましたから。普通の人間に怪異かそうじやないかなんて区別つかないんですよねえ」

忍は怪異かそうでないかわかるのだろう。

忍がいなければ今頃俺は撃たれていたかもしれない。

ここにいない彼女に感謝を捧げつつ、一行に反省せずにヘラヘラ笑っている男を一発殴ってやりたい。

「だからつて！」

「大丈夫です。これは怪異っぽいなつて勘で撃つたんで」

「勘？勘だけで人を殺したのかよ！！」

「アレは人じゃないですよ。人はあんな風に再生しません」

「再生！？」

見ればおばさんは立っていた。さつきと変わったところといえば身体の穴が消えたくらいか。

おばさんは静かに笑っていた。微笑んで俺達を見つめていた。何も言わずに。何事もなかったかのように。

どうしておばさんはそれがありえないことだと気付かないのだろう。人は撃たれたら死んでしまうものなのに。おばさんは立っていた。

「おば…さん…？」

「正面に走れ！！」

カートリッジを入れ替えて鍊弥はまた撃った。





乾いた笑いが真夜中の道路に響く。

足を動かす事もできずにへたり込んだ俺は夜空を見つめながら笑った。

今はもうちょっとそうしていたかった。やっと俺は助かったのだから。

そんな安心をしていたからだろうか油断していた。

ここは道路のど真ん中で、まだ終わっていなかった事を俺は知らなかった。

しばらくそうしているうちに車のエンジン音が聞こえた。

音からしてかなり大きなトラックのような車だろう。

このままでは危ないと俺は疲れる脚を何とか動かして移動しようと思っていた。

思っていたのだが…。

「あ、あれ…動かない」

足が地面に縫いついたように動けなかった。

音はどんどん迫ってくる。しかし、俺は動けない。

何故なら…。

「ヒッ」

俺の脚には複数の手があった。

小さな子供の手が俺を逃がさないようにガッチリと押さえつけていた。

トラックが目視できる距離に迫る。

あっ。これは死んだ。死亡フラグが立ってしまった。

俺は危険が迫って動けなくなったネコのように固まって、迫るトラックを見つめていた。

「要！止める！」  
「応」

そんな中はつきりと聞こえた女性の声と応えた男の声。

一人の男がトラックの前に躍り出て、両手を出す。

トラックはブレーキをつけながらその腕にぶつかった。

トラックはそのまま男を30センチほど押したが、俺の前でちゃんと止まった。

啞然としている俺の前にやってきたのは白髪の少女。

セミロングくらいの長さの少女は一本の刀を抜くと俺の足回りを薙ぎ払う。

すると、手はいなくなり金縛りが解けた。

「今日も散歩か？晴智晴之」

「貴方は……」

「空巢町風紀委員委員長。神坂かぐや。君を逮捕する」

「……はあ！？」

カシヤ。

遠い地にいるお母様。お父様。

俺の災難はまだまだ続きそうです。

状況 1

浮浪する少年？（後書き）

またちよつとオーバー…。

字数を減らした方がいいのかもしれない。

御剣兄妹…特に兄を書くのが楽しかったです。

誤字、脱字報告、感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4898z/>

---

空巢の風紀委員

2011年12月20日22時55分発行